

2026年5月10日 第二礼拝

説教題『光を語り告げる』使徒言行録26章12～23節

主任牧師 加藤 誠

「つまり、私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」(使徒言行録26章23節)

キリスト教の歴史の中で「絶対に欠かせない」出来事を上げるとしたら、第一はイエス・キリストの十字架と復活の出来事であり、第二は主の直弟子ペトロたちの立ち上がりの出来事でしょう。十字架の後、もし彼らが暗い部屋の中に閉じこもったままではいたならばキリスト教会は誕生しなかったからです。そして第三には使徒パウロの存在です。パウロを通して主の福音は当時の世界中に届けられ、それまでのユダヤ人中心の集まりだった教会が、世界のすべての民の交わりに変革されていったからです。

ローマ市民であり、ヘブライ語とギリシャ語に堪能なパウロだったから、異邦人相手に自在に福音を語り、手紙を書くこともできたのです。そして当時のローマの権力者たちを前に堂々と全力でパウロは福音を語る事ができました。その言葉がルカによって記録され、二千年後の私たちもそれを読めている。最初反逆者だったパウロを捉えて、御自身の器として用いられた神の不思議を、そこに見ます。

そのパウロが今朝の場面で主イエスのことをこう語っています。「わたくしは、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると、述べたのです」(20節)。ここで「なるほど、そうなのか!」と思ったのは、「光を語り告げる」のは主イエス御自身であるということ。パウロが「主イエスは復活された」というとき、それは過去の一点の「過去形」の出来事ではなく、「主イエスは復活して、今も働いておられる」という「現在進行形」の出来事だということです。パウロにとって「生きる」とは「主イエスと共に生きる」ことであり、パウロの「伝道の旅」は「主イエスと一緒に伝道する旅」であり、すべての「迫害」は「主イエスと一緒に受ける苦難」だったのです。

その復活の主イエスが今も生きて働かれ「光を語り告げる」ことで、どういうことが起こってきたかをパウロは18節で簡潔に述べています。

「光を語り告げる」主イエスの働きの第一は、私たちの「目を開ける」ということ。パウロの回心体験は「うろこのようなものが落ちて目が見えるようになる」体験でした。見ていたつもりが実はまったく見えてなかった。なぜ主イエスが十字架に磔にされたのか。パウロは「イエスの自業自得だ」と思っていたけれど、実は主の十字架はパウロの罪のためだったことを後から知った。だれがイエスを十字架で苦しめたのか。それはほかならない自分だったのだ。それでも自分のために祈り続けてくださった方の姿がまったく見えていなかった。パウロの心の目が開かれて、主イエスの苦しみと祈りの意味が見えてきた時、パウロは神の愛に向けて方向転換させられたのです。

ある牧師から「後から父の愛を知らされた」という証しを聞いたことがあります。「真実の愛は後から知らされ、後から見えてくる」。十字架の主イエスの愛はすべての人に注がれている愛でありながら、その時には見えていないし、気づかれない。しかし後になってその愛の真実とそこに込められた祈りを知らされていく。その意味でパウロも後になって主イエスの愛が見えてきた一人でした。その愛こそ真実の愛であり、私たち人間を新しくし、お互いの関係を変えていく愛です。私たちの心の目が開かれてその愛が見えてくるのを、主イエスは今日も待ち続けておられます。

「光を告げ知らせる」主イエスの働きの二つ目。それは私たちを「闇から光に、サタンの支配から神のもとに立ち帰らせる」働きです。主イエスと出会う前のパウロは、自分が絶対に正しいと信じる神のためなら暴力を用いることに何の躊躇もありませんでした。自己絶対化と暴力の肯定。これはサタンの支配の世界です。「神さま、神さま」と叫んでいれば正しいか。違います。サタンも天使に偽装するからです。そのパウロが主イエスと出会って方向転換させられます。先週ローマ 12 章を読みましたけれども、「自分で復讐するな。神にお任せしなさい。敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませなさい。悪に対して悪で返すことなく、善をもって悪に打ち勝ちなさい。そして、すべての人と平和に暮らしなさい。」パウロは主イエスと出会い、闇から光へ、サタンの支配から、神のもとに立ち返らされたのでした。

そして三つ目。主イエスは私たちを「罪の赦しと恵みの分け前」に導かれます。「罪の赦しと恵みの分け前」とは端的に言うところ「希望」です。エフェソ 1:17 以下が語る「神のもとにある希望」。その「希望」につなげられる時、わたしたちは「心配や不安、焦りや疑い」から心を守られて「感謝と賛美、笑顔とささげもの」という、神の恵みを生きる者に変えられていきます。

パウロの目の前にはいつも困難がありました。今日の裁判の場面のように人々から馬鹿にされ、奇異の目で見られ、冷たい拒絶反応を受けることが多々ありました。24 節以降でフェストゥスはこう語ります。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ」と。フェストゥスにとって、死んだイエスが「今も生きている」などというパウロの主張はあまりに馬鹿げた話だったのでしょう。そのような冷たい拒絶反応を浴びながらもなおパウロは前進していきます。なぜならパウロは「神のもとにある希望」につなげられていたからです。私たちは力弱くても、目の前の壁がどんなに厚く見えても、神の御心は必ず実現する。神の御業は成る。自分の願うことが願うとおりに起こらなくても、神の御業になることを賛美していく。「神のもとにある希望」につなげられていたパウロは、それゆえに常に前を向くことができたのでした。

私たちもまた、今日も私たちの間で光を語り告げる主イエスに、心の目を開けていただき、サタンの支配から神さまの愛の支配のもとに移していただき、神の希望につなげられながら、主の福音を隣人と世界の中で証していきましょう。